

令和 6 年度 具体的な学校経営目標・計画

1 組織的な学力向上施策

1 組織的な学力向上施策				岡山県立高梁高等学校 No. 1						
本年度の 重点目標		担当	目標達成のための具体的計画	達成基準	中間達成状況と評価			最終達成状況と評価		
					達成状況		評価	達成状況		評価
①	資質・能力を 育成する R－ P D C A サイ クルの実践	教務課	本年度各教科が身につけさせようとする資質・能力の育成に向けて、学習指導年間計画に基づき、R-PDCAサイクルを意識した取り組みを行ってもらえるように、教科主任を通じて働きかける。	生徒を対象とした授業評価アンケート 「教科で目標とする資質・能力が身についた」という質問に対する回答の肯定群が 7 0 %を超える教科が 9 教科中 A：7 教科以上 B：5 教科以上	年度当初に学習指導年間計画を職員会議で示し、年度当初の講座開き・学習方法体験講座に始まり、日々の授業を行う中で教員相互の授業公開・研究協議などを行い、R-PDCAサイクルの各ステージ・取り組みを理解しながら、各教科の指導に取り組んでいる。授業評価アンケートの結果は、全教科で70%を超える肯定的回答が得られた。		A	中期段階で生徒による授業アンケートの結果、各教科が重視している資質・能力の育成について今年度の目標は達成できている。後期に各教科で作成した資質・能力の育成に対する評価ルーブリックの活用を含め、次年度もR-PDCAサイクルを意識した学習指導を充実させていきたい。		A
		家政科	家政科が今年度から使用している「今未来手帳」を活用しながら、日々の自分の行動を意識し、自分自身と周囲の状況を客観的に捉え、振り返ることができる場面を増やす。	生徒を対象とした家政科アンケート 「手帳等の活用により、自分の行動を客観的に捉えて調整することができた」という質問に対する回答の肯定群が A：8 0 %以上 B：6 0 %以上	手帳を活用し、課題やスケジュール管理、定期考査の振り返りに加え、一週間の計画・反省を記録するなど自己管理能力を意識して指導している。		B	自分でスケジュールや課題の管理をする能力をつけるため日々手帳に記入する習慣は概ねついた。生徒アンケートにおいて 「手帳の活用について」肯定的な回答 74.2% 「手帳を使用し計画的に行動できた」肯定的な回答 79.4%		B

2 キャリア探究プログラムの深化

本年度の 重点目標		担当	目標達成のための具体的計画	達成基準	中間達成状況と評価			最終達成状況と評価		
					達成状況		評価	達成状況		評価
②	系統的なキャリア探究プログラムの構築	進路課	3年間のロードマップをもとに、「進路×生き方探究」と「地域×課題探究」を連動させた探究活動を実施する。それぞれの活動の前に、年次主任と探究係を中心にその趣旨と目指す方向性などの共有を図る。	教員を対象とした学校自己評価アンケート 「総合的な探究の時間『方谷学』は、地域・社会の課題の解決に向けて動く能力を育み、将来の進路選択や望ましい生き方を考えることに役立っている。」という質問に対する回答の肯定群が A：85％以上 B：80％以上 (参考) R5年度の類似項目アンケートでの肯定群は82％。	生徒のキャリア観を醸成するという大きな目的のもと、進路に関するLHRと総合的な探究の時間の2つの軸を中心に、各教科学習との関連を意識したコンテンツを開発してきた。各コンテンツの位置づけ、目指す方向性について進路課で共有を図ってきた。今後は、3年間でどのような生徒を育てたいかという大局的な視点で、県外高校視察の内容も反映させながら、キャリア探究プログラムを充実させていきたい。	B		教員対象の学校自己評価アンケートの結果では、基準をわずかに達成できなかった。すべての教育活動が生徒のキャリア観の醸成につながっているという意識を十分に共有することができなかった。係が一括で生徒に伝えるのではなく、目の前の担当者が生徒の実態を見ながら運営していくスタイルで進めることはできたが、探究係と運営担当者以外にも、所属する年次教員全体であられるよう、活動内容の共有をいっそう深めていきたい。県外高校視察を受けて、探究サイクルを2回経験できるよう、次年度から1年次前半のプログラムを変更する。	B	
			肯定的回答77.1％（27件）、否定的回答3件、中立な回答5件							
③	ICTを活用した文理横断的・探究的な学びの促進	進路課	データサイエンスを意識した探究活動を進める。生徒が方谷ゼミで探究を進めていく過程で、CiNiiやGoogle Scholarなどを使って先行研究を調べたり、地域経済分析システムRESASなどから統計を活用したりできるよう支援する。	生徒対象の学校自己評価アンケート 「総合的な探究の時間で、探究を進めていく過程で、先行研究を調べたり統計データを扱ったりすることの重要性を意識した。」という質問に対する回答の肯定群が A：80％以上 B：70％以上	1年次生は、前期に社会課題を発見する視点を学び、後期には2年次から本格始動する「方谷ゼミ」に必要なスキル獲得の一環として統計を扱ったり、先行研究にあたったりすることで「説得力をもった意見」を主張できるような準備をしている。2年次生は、「方谷ゼミ」の中で実験・社会調査をするなかで、データに基づいて発表を展開しようとするグループが増えている。	B		1年次でスキル獲得の一貫として統計を扱ってきたが、生徒対象のアンケート結果によると、統計の必要性を感じており、少し難しいと感じながらも理解度は一定水準に達していた。2年次でも、39グループ中26グループでグラフや表を用いて調査データを示しており、先行研究についても25グループで参考文献として記載されていた。	A	
		アンケートの肯定的回答 1年次：91.1％ 2年次：85.4％								
		情報室	ICTを活用した文理横断的・探究的な学びの促進につながる校内研修を年間5回行う。	教員対象の令和6年度1人1台端末を活用した学びの変容状況把握 ①「生徒が端末を活用して情報を整理・分析する活動を設定していますか」 ②「生徒が端末を活用して発表する活動を設定していますか」 の質問に対する肯定的な回答群の割合がそれぞれ A：75％以上 B：70％以上 (参考) R5度の2回調査平均：①71.9％ ②70.8％	教務課が実施する授業見学においてICT活用の項目があることや、ポータルサイトなどの活用によりICT機器を日常的に活用する環境が整っている。また、教員向けICT活用研修を年度当初を含め、2回実施した。 教員対象の令和6年度1人1台端末を活用した学びの変容状況把握 ①「生徒が端末を活用して情報を整理・分析する活動を設定していますか」第1回調査76.3％ ②「生徒が端末を活用して発表する活動を設定していますか」第1回調査76.3％	B	A	年度途中から生成AIを活用したプロンプトツールを導入し、活用研修を3回行った。教員向けICT活用研修を年間5回実施し、ICTの活用が進んでいる。	A	
教員対象の令和6年度1人1台端末を活用した学びの変容状況把握 ①「生徒が端末を活用して情報を整理・分析する活動を設定していますか」第2回調査89.7％、年間平均83.0％ ②「生徒が端末を活用して発表する活動を設定していますか」第2回調査74.3％、年間平均75.3％										
④	難関大・ブロック大へ向けた指導の充実	進路課	教科担当者を加えた拡大年次会を開催し、進路指導マニュアルの基準と照らし合わせて志望形成を行い、個別の教科指導体制を確立する。また、OB・OGの協力も得ながら、難関大志望者を対象とした集会（1・2年次生）、岡山大志望者を対象とした集会（2年次生）を開催し、上位大への志望意識を高める。	A：進路志望調査で各年次3～5名程度の難関大志望者がいる、かつ11月進研模試での3教科総合または5教科総合の学習到達ゾーン（GTZ）でA2（岡山大合格ライン）以上が10名以上いる。 B：Aのいずれかの項目が満たされていない状況 (参考) 進研模試の様子 現2年次生の昨年度・・・3教科A2以上（6人、9人、5人） 現3年次生の昨年度・・・3教科A2以上（12人、11人、15人） 現3年次生の昨年度・・・5教科A2以上（7人、14人）	OB・OGの協力を得て集会を7月末に開催。また、進路課が提供する成績データをもとに各年次のはたらきかけにより、難関大志望の生徒は、入学時と比べて1年次1人⇒3人、2年次0人⇒2人、3年次1人⇒6人と増加している。このメンバーに加えて岡山大の一般入試を目指す生徒群に対しては、個別最適な学習課題を提供し、教員側のはたらきかけによる志望形成と実力養成を図る。 進研模試（7月記述）の様子としては、学習到達ゾーンでみると 現1年次生・・・3教科A2以上1人 現2年次生・・・3教科A2以上5人 現3年次生・・・5教科A2以上14人 という状況。	B		成績データをもとに各年次で対象生徒にはたらきかけ、高い志望を抱く生徒は増えつつある。集大成としての3年次では、岡山大レベル以上を目指す生徒を対象に国数英3教科中心に個別最適な課題を提供し、実力を養成してきた。推薦入試で合格した神戸大1人と岡山大8人に加えて、大阪大に2人、神戸大に1人、岡山大に7人が一般入試で合格し、このレベルの合格件数は現行のクラス数になって最大となった。1・2年次では、A2ゾーン以上の生徒は少ないが、A3ゾーンに10名弱の生徒がいるため、そこを中心に伸ばしていきたい。各教科内での指導法の共有や継承は、引続き課題である。	A	
進研模試(1・2年次は1月、3年次は11月)の学習到達ゾーン 現1年次生・・・3教科A2以上6人 現2年次生・・・3教科A2以上6人 現3年次生・・・3教科A2以上23人 となっている。										

3 ポストコロナのグローバル教育の充実

本年度の 重点目標	担当	目標達成のための具体的計画	達成基準	中間達成状況と評価		最終達成状況と評価				
				達成状況		評価	達成状況		評価	
⑤	国際交流プログラムの進化	教務課	①台湾港明高校との姉妹校提携を結び交流を開始する。 ②姉妹校受入プログラムの確定・実施	A：①②両プログラムともに無事終わることができた。 B：どちらか片方のみになった。	台湾港明高校の本校訪問イベントは、事前のオンライン交流を含めて大成功に終わった。その際に、姉妹校締結に向けた今後の手順についても両校で確認することができた。 NIHSとの姉妹校受入プログラムについては、ポストコロナ初の受け入れのため、過去のプログラムを参考にしながら、見直しを含めて作成し実施した。姉妹校生徒には、充実した一週間を過ごしてもらい、受け入れ担当の本校生徒も含め、相互に学びの多いプログラムとなった。	A	A	令和5年度の訪問、令和6年度の受け入れ、その間のオンライン交流を含め、NIHSとのポストコロナの新しい短期交流プログラムができあがった。来年度は、中期留学プログラムの再開と整理を行う。台湾港明高級中学に12月に訪問し、今後に向けた最終協議を行い、令和7年に姉妹校締結が実現しそうである。今年度は交流のなかったフランスのアンペール高校との交流を含め、本校の国際交流プログラムは概ね整理することができた。	B	B

4 安心・安全で快適な学習環境の確立

本年度の 重点目標	担当	目標達成のための具体的計画	達成基準	中間達成状況と評価			最終達成状況と評価			
				達成状況		評価	達成状況		評価	
⑥	初期指導の充 実	教務課	たか高 Fit in サポートの各プログラム等、年度当初のガイダンス等のサポートを充 実させることにより、学習習慣・生活習慣を確立させる。また、学校生活を通し、 良好な人間関係を築き、たか高の魅力を感じて学校生活を送ってもらう。	生徒対象の学校自己評価アンケート 「学校行事は充実したものとなっている。」「総合的な探究の時間は、 将来の進路選択や望ましい生き方を考えるうえで役立っている。」「学 校は、自分の進路選択に向けて、生徒・家庭・学校の3者間で連携をとり あいながら、きめ細かな指導を行っている。」「習熟度別授業や少人数 授業によって、よりわかりやすい授業を受けられる。」の質問に対する回 答の肯定群が85%を超えている項目数が A：4項目全て B：2項目以上	入学式翌日から第1回定期考査まで、HRだけでなく年次全体の取り組み として生徒をサポートする取り組みを実施できた。前期を終えて、生徒 間の大きな問題もなく、生徒は学習に対しても前向きに取り組む様子が 見られる。 月日の流れと共に、個々の問題が見えてくる生徒もいるが、担任を中心 に関係教員で慎重に対応ができています。	B	B	生徒対象の学校自己評価アンケートの結果は、①学校行事は充実したも のとなっている。(93%)、②総合的な探究の時間は、将来の進路選択や 望ましい生き方を考えるうえで役立っている。(78%)、③学校は、自分 の進路選択に向けて、生徒・家庭・学校の3者間で連携をとりあいなが ら、きめ細かな指導を行っている。(78%)、④習熟度別授業や少人数授 業によって、よりわかりやすい授業を受けられる。(88%)であった。③ に関しては、次年度から12月の懇談を三者懇談にし、生徒の進路選択 に向けて3者でより連携をとったものとしていく。	B	A
⑦	教育相談体制 の確立	生徒課	時程内で特別支援コーディネーターを中心に生徒に関する情報を共有する特 別支援会議を設ける。具体的な方策としては、リアクティブ的な教育相談の みならず、すべての生徒にスクリーニングをかけるプロアクティブ的な教育 相談を重視した体制を確立する。スクリーニングにおいても、連続欠席3日 や保健室利用週3日以上などの基準を設定することで、各年次主任などがリ ストアップしやすくし、網羅的に教育相談が必要な生徒を把握し学校全体で 一体となってそれぞれの生徒に対応していく。	生徒対象の学校自己評価アンケート 「悩んだり困ったりすることがあれば、面談等さまざまな機会に先生に 相談することができる。」の質問に対する回答の肯定群が A：80%以上 B：70%以上 (参考) R5年度の調査では肯定群が74%	必要に応じて時程内での特別支援会議が行われている。年次ごとに特別 支援が必要な生徒に対して迅速な対応ができています。また、SSWなど公 的機関への接続も密に行うことで、より専門的なアプローチを生徒へ提 供できていると考える。	A		特別支援会議については、必要に応じて現在まで9回持つことができ た。第一回会議ではSSWを交えて今後の連携等の確認ができた。ま た、SSWによる全教職員対象の研修会も実施することができ、本校教 員の特別支援におけるスキルアップに繋がった。生徒へのアンケートに おいても「悩んだり困ったりすることがあれば、面談等さまざまな機会 に先生に相談することができる。」の肯定群が81%であった。概ね目 標は達成できたと考えている。	A	

5 学校からの情報発信の進化

本年度の 重点目標		担当	目標達成のための具体的計画	達成基準	中間達成状況と評価			最終達成状況と評価		
					達成状況		評価	達成状況		評価
⑧	戦略的かつ効果的な広報活動による生徒募集	総務課	HPブログを軸として本校の魅力や特長を効果的に外部発信するHP・SNS運営を行う。HPブログでは活動の様子を逐次的に発信するとともに、行事等の告知を計画的に発信し、行事等参加者の加増に貢献できるような運営を行う。	HPブログで行事等の告知を計画的に発信する取組を通じて、学校行事等の来場者総数を昨年度よりも加増させる。 A：昨年度比60名以上多く増加した（5%以上） B：昨年度人数に対して同数～数名増加した（5%未満） ※昨年度総数 約1,200名	4～9月の6か月間に、ブログ投稿は約160回（月平均約26回）行うことができしており、学校からの情報発信を恒常的にを行っている。HPブログでの行事告知を複数回行ったこともあり、参加者が昨年度よりも加増できている。 夏季オープンスクール183名→273名 秋季オープンスクール58名→84名 松嶺祭一般公開日514名→548名 スプリングコンサートを昨年度と同規模（400名程度）と想定すれば、昨年度比で来場者総数が約150名増加する見込みである。 昨年度のHPリニューアルに加え、コンテンツ全体の充実・向上を進めたことで、HPを見て行事に参加したり、学校見学を希望する中学生保護者が増えている。	A	A	4～12月の9か月間に、ブログ投稿は247回（月平均約27回）行い、全てSNSと連携しブログに誘導している。学校からの情報発信を恒常的に行い、更新ペースも前年度12月末時点の更新回数179回と比較すると、前年度よりも速い。結果、4～12月の9か月間のHPへのアクセス数は、242,559→351,561と増加している。加えて、高梁市役所、高梁市図書館をはじめとする地域の公共施設や店舗にもポスターを掲示するなど、広報を工夫した結果、学校行事への参加者は増加した。しかし、家政科展への中学生の参加が少ないなどの課題もあり、中学生が興味を持ちやすい企画や広報の工夫が必要であると考えている。	A	A
⑨	保護者の学校理解の促進	総務課	保護者に本校HP・SNSによる情報発信が周知されるよう働きかけると同時に、本校教育活動に対する保護者の理解度を深めるための情報提供の質・量の向上を図る。具体的には、保護者の来校行事の告知を計画的に行い、行事内容の充実を図り、保護者の声を生かすよう校内外に働きかける。	保護者対象の学校自己評価アンケート 「本校HP・SNSや行事等を通して本校の教育活動に対する理解が深まった」の質問に対する回答の肯定群が A：85% B：80% (参考) R5年度の調査では肯定群が82%。	保護者向けの学校行事の告知を、「保護者連絡システム」アプリ及びHPブログにて細かく周知し、参加を呼びかけることができている。保護者の来校に合わせて、HP・SNS・YouTubeなどで本校学校生活の様子を紹介していることを周知するようにしている。	B	B	保護者対象の学校自己評価アンケート 「本校HP・SNSや行事等を通して本校の教育活動に対する理解が深まった」の質問に対する回答の肯定群は、85%であった。昨年度と同様の質問・回答の肯定群は82%で、3ポイント上昇した。本取り組みについて多くの保護者の理解を得られたと考える。	A	A